

P-025

急性期病院における新人看護師が他施設研修で得た学びの評価

徳島赤十字病院 看護部

○宮本 由美、早瀬 由美、庄野 泰乃

【目的】急性期病院であるA病院では、ADL介助に必要な看護ケアの実際を学び、看護実践に活かすことを目的に、2012年度より新人看護職員研修に5日間の他施設研修を導入し3年が経過した。今回、他施設研修の成果を検証したので報告する。
【方法】A病院病棟勤務の看護師で、2012年～2014年に他施設研修を受けた研修修了生62名を対象に、2016年1月～2月自記式質問紙調査を行った。調査内容は、他施設における看護ケアの学び、退院支援の学び、チーム医療の学び等の16項目で構成し、単純集計とした。
【倫理的配慮】調査の趣旨を文書で説明し、調査用紙の回答をもって同意とした。また、徳島赤十字病院倫理審査委員会の了承を得て行った。
【結果】回収率は61％で、内訳は、経験年数2年目13名、3年目14名、4年目11名であった。看護ケアに活かすことができているかについては、大変そう思う、そう思うと答えた者が清潔ケア84％、排泄ケア76％、食事ケア82％、安楽な体位79％であった。その中で、特に活かすことができている項目は、口腔ケア、オムツ交換、食事介助、ポジショニングであった。退院支援の学びでは、入院中からの退院支援の必要性や他施設との連携、地域における急性期病院の役割、転院時の手続きの全項目で80％以上の者が学びがあったと回答した。チーム医療の学びでも、他職種との連携、看護師の役割、カンファレンスの必要性の全項目で90％以上の者が学びがあったと回答した。また、対象者全員が「貴重な体験となった」、「先輩に勧めたい」と答えていた。
【結論】他施設研修での学びは日常の看護ケアに活かせる内容であるとともに、急性期病院としての役割や地域連携の理解につながっていた。

P-027

看護サマリーの受け手が必要としている患者情報について

高山赤十字病院 看護部

○森下 真哉、丸山 和子、田中 詩織、竹田 茂信

地域包括ケア病棟の運用開始に伴い、介護施設への情報提供を行う機会が増加した。B病院の主な情報提供手段である看護サマリーを、受け手に伝わりやすい内容とするために、看護サマリーにどのような情報が必要としているかを明らかにした。介護老人福祉施設・介護老人保健施設に勤務する看護師・介護職員合計329名を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査の結果、看護サマリーには14項目（1. 病名、2. 介護保険、3. 入院中の問題点、4. 家族の支援体制、5. 既往歴、6. 生活状況：清潔、7. 生活状況：食事、8. 生活状況：排泄、9. 生活状況：移動、10. 生活状況：睡眠状態、11. 生活状況：日常生活自立度、12. 生活状況：認知症の症状、13. 生活状況：褥瘡、14. 生活状況：コミュニケーション）の情報が必要。看護師・介護職員ともに生活状況についての情報を重要視しており、詳細な内容を必要としている。看護師は医療処置についての情報を重要視しており、介護職員は日常生活、家族背景についての情報を重要視している。看護サマリーは、平易な言葉を用いて、具体的な介助方法を記載するなどの工夫が必要であるという結論を得た。今後、看護サマリーの受け手に、より伝わりやすい内容とするために、記載方法や表現方法について検討していく必要がある。

P-029

患者目線での看護計画の説明を実施してー外来から継続した看護を行うためにー

前橋赤十字病院 看護部

○小宮山のぞみ、矢部 愛子、細野 恵子、田村 教江

【はじめに】A病院産婦人科は、産科・婦人科の混合病棟であり、昨年度平均在院日数は6.5日、手術件数は532件、分娩件数は382件である。病棟・外来が一元化されており、短い入院期間でも、患者が安心して過ごせる環境作りを努めている。昨年度「患者・家族が理解しやすい看護計画の提示・説明を行う」ことを病棟目標の1つとして掲げ、患者にとってより満足度の高い看護の提供に繋がるよう、入院診療計画書では不足していた入院中の具体的な看護計画を作成し、個別に外来から説明を行った。今回、作成・実施した看護計画の説明について看護師、患者にアンケートを行ったためその結果を報告する。
【活動内容】看護計画書は開腹手術等5種類を作成し、スタッフに周知した。H27年12月から運用を順次開始した。その後、看護師・患者へアンケートを作成し、投函をもって同意とし、看護計画の内容や説明について調査を開始した。
【結果・考察】看護師アンケートでは、全員が外来から看護計画を説明する必要があると回答した。患者アンケートでは、約9割が看護計画の説明が分かりやすかった、患者目標を意識して入院生活を送れたと回答した。このことから患者が理解しやすい看護計画の説明が行えており、外来から看護計画の説明を行う事は効果的であるといえる。一方、高齢の患者からは字が小さいとの意見があった。また、看護師も4割が用紙を見づらいと回答し、看護計画内容の時間経過が説明しづらいとの意見があったため今後、用紙のレイアウトや内容・説明方法について再検討を行う必要がある。
【結語】アンケートの結果を踏まえ、今後、患者がより理解しやすい看護計画書に改訂し、運用方法の再検討を行っている。

P-026

手術見学導入の経緯と効果

静岡赤十字病院 3ー7病棟¹⁾、静岡赤十字病院 手術室²⁾

○高橋 涼子¹⁾、植松 知子¹⁾、細澤 祐子²⁾、前田 寛子²⁾、萩原 晶子¹⁾、堀 優里風¹⁾、下山 美穂²⁾、牧野 仁美¹⁾

【はじめに】A病院整形外科は脊椎センターを有し、整形外科疾患で年間1600件を超える手術を行っている。A病院のB病棟では、脊椎手術の全例と人工関節置換術をはじめとする膝・股関節の手術を年間900件受け入れている。看護師は手術前後の全身管理や合併症予防、リハビリテーション等に専門性の高い看護が求められている。そのためスタッフ個々の学習に加え、病棟でも勉強会や症例検討等を行い質の向上に努めてきた。手術に関しては数年前から手術見学について検討していた。しかし、実際の場面を見る機会はなく、学生時代に見学した知識をもとに、整形的知識を補いながら看護を行っている状況であった。今回スタッフが、効果的に手術見学ができることを目的に、手術見学の企画・実施を行ったので報告する。
【経緯】問題点の明確化を目的に病棟係長が手術見学を体験した。抽出された問題点を踏まえ具体策を検討後実施した。1.手術見学に対するスタッフの緊張感緩和のために、リフレットの作成、PNSマインドを生かした見学体制、手術室との関係構築を行った。2.学ぶべき内容の明確化のために見学シートの作成、見学シートの活用方法についてのインフォメーションを行った。3.手術見学により学びを深めることも業務の一環とし、時間内での見学体制を整えた。
【結果】スタッフ全員が手術見学を行うことができた。またスタッフの振り返りから前向きな感想が聞かれ、手術前後の看護に活かせる見学となった。

P-028

糖尿病性腎症と心不全のある患者への食生活再編に向けた指導方法の検討

福井赤十字病院 看護部

○田中 裕子、西川 順子

【はじめに】何度も食事指導を受けてきたが、行動変容が出来ていなかったA氏に対して変化のステージ理論を用いて看護介入を行った。この過程を振り返り、行動変容に繋がる効果的な介入方法を検討する。
【事例紹介】A氏60代女性。両下肢の慢性閉塞性動脈硬化症の治療のため入院。経皮的動脈形成術後の造影剤アレルギーにより全身状態が悪化し、心不全を発症した事例。夫・娘夫婦・孫の5人暮らし。
【経過と看護の実際】(1)無関心期:全身状態悪化時には「私は死んでしまうの？あの治療をしなければ良かった。」などの発言があり混乱状態であった。少しずつ病態や治療に関する説明を行い、誤った認識を修正できるようにした。(2)関心期:正しい病状理解が出来るようになった時点で、入院前の生活を振り返ってもらった。「何度も指導を受けたけど、実践できない。どうしたらいい？」との発言を受け、これまでの努力を認めた上で食生活再編の必要性を説明した。(3)準備期:実践できなかった原因をA氏自身が考える機会を持ち、自分では調理せず、娘夫婦の好みに合わせた食事になっていたこと、家族に糖尿病は自業自得と言われ孤独感を抱いていたことが分かった。そこで夫を交えて栄養指導を行い、家族の支援を求めた。退院後に実践できそうな具体的な行動策について一緒に考え、その後も振り返って定着するよう関わった。(4)行動期:退院3週間後に面談を行い、工夫して食事療法を継続する事ができていることを確認し、その努力をねぎらい、継続を促した。
【考察】変化のステージ理論に基づいてA氏への看護を行い、食生活を再編する事ができた。各段階に合わせた関わりができたこと、特に準備期にこれまでを振り返って問題を明らかにし、解決に導くことができたことがA氏の行動変容に繋がったと考える。

P-030

超急性期透析患者に対する透析センター看護師の看護介入

武蔵野赤十字病院 看護部

○比嘉みどり、谷川 苑実、遠藤 敏行、齋藤 恭子

【背景と目的】当院は地域の三次救急医療施設病院としての機能を担い、42床の集中治療ユニットを有している。ユニットでの透析（以下出張透析とする）では、臨床工学技士が機器のトラブル対応や返血などの技術を提供し、ユニット看護師が集中的な身体管理を担っていた。透析センター看護師は出張透析に介入していなかったが、透析中の予測性を持った観察、且つ透析治療の専門技術を有しており、ユニット看護師と協働することで透析治療・看護の質の向上に寄与できないかと考えた。また超急性期からの治療参画により、継続性を持った看護に繋がると考え取り組みを行った。
【取り組みの実際】1期間:2015年9月～2016年3月出張透析数:150件（述べ55名）透析センター看護師介入数:125件（述べ44名）2経緯透析センター看護師の出張透析への業務参画の目的と方法を各部門に通知し、当該師長の承認を得て取り組みを開始した。透析前後ではユニット看護師と透析治療内容や治療に伴い予測される身体的変化を情報共有した。透析中はユニット看護師が主に患者の身体管理を行い、透析センター看護師は穿刺や返血、トラブル時の機器操作などの専門的な透析看護の提供を行った。また時間毎の身体観察や機器モニタリングを行うことで、変化予測に基づいた迅速な対応ができた。透析センター看護師は、ユニット看護師と双方の専門性を発揮し協働したことで、より効果的な透析治療・看護の提供が行えたと考え。超急性期から看護介入を行ったことで病状経過の把握が容易となり、地域医療機関に対しての看護の継続性を持った情報提供が可能となった。
【課題】透析センター看護師による看護介入に関する、ユニット看護師の評価を行った上で、双方で患者への効果を検証し当院においての出張透析の在り方の検討が課題である。